

- S1M ユーザーカンファレンス 2014 開催レポート
- 国際科学編集者会議 (CSE) 参加レポート
- e-form の使い方例



SCHOLARONE  
MANUSCRIPTS  
ユーザーカンファレンス

9月4日、杏林舎とトムソン・ロイターの共催で、ScholarOne Manuscripts™ (以下S1M) ユーザーカンファレンス2014が開催されました。

3回目を迎えた本カンファレンスでは、S1Mの魅力と効率的な使い方の紹介に加え、研究・出版倫理をテーマにした講演とユーザープレゼンテーションが行われました。

回を重ねる毎に増してきたお客様の期待とトピックへの関心の高さを表すように、参加者数は過去最多となり、秋葉原コンベンションホールは満場のお客様で埋め尽くされました。

今回は、S1Mのユーザーだけでなく、導入をご検討されているお客様にもご

## ユーザーカンファレンス 2014 開催レポート

# 「論文の不正」が騒がれる今こそ 考え直したい 研究・出版倫理

参加頂きました。そうした新規のお客様にもS1Mについて知って頂くために、トムソン・ロイターのGeorge Kowal氏によって『世界の学会・出版社からS1Mが選ばれている理由』の講演がありました。データやチャートを用いて分かりやすくS1Mの魅力が語られた他、最近搭載された機能や今後の展望についての説明がなされました。

**レポート機能の活用で目標達成！書類収集の煩わしさを解消する「e-form」**

続いては、S1Mの機能紹介です。今回は、日頃問い合わせが多い「レポート機能」と新機能である「e-form」を取り上げました。

レポート機能については、杏林舎の山田が「編集委員会資料の作成事例」と題してご説明しました。資料には大きく分けて「計画を立てるために現状を把握する資料」「計画を実行するための資料」「取り組みの成果を検証する資料」「改善点を見つけるための資料」があり、S1Mを用いれば最適な資料が作成可能であることを解説しました。講演後には「データの種類の活用がこれまで豊富だとは知らず、今まで活用して来なかった。今後はジャーナル運営の改善に役立てたい」等の反響がありました。

「e-form」については、杏林舎の真鍋がその概要をご紹介しました。著者同意書や利益相反申告書提出の依頼からリマインダー送信、そして、提出後の管理まで一括してS1M上で可能になることをご説明すると「全著者から書類を集めるのは大変な労力を要します。すぐに利用したいです」等多数のご意見を頂きました。

## 日本の信頼回復のために、不正や著者教育を一緒に考えよう！

今回のメインテーマである研究・出版倫理に関して、東京大学医学部医学教育国際研究センター教授でJAMJE (日本医学雑誌編集者会議) 組織委員会委員長の北村聖先生による特別講演が行われました。

「不正への対応に答えはありません」「日本の信頼は地に落ちています」という衝撃的な言葉で講演は始まりました。単に厳罰に処すだけでは根絶に繋がらないというこの問題の難しさ、そしてSTAP論文が世界に与えた影響の大きさを端的に言い表して、「真剣に取り組みなくてはならない」という思いを新たにしました。

論文の不正に関する歴史や最近のトレンドとその影響まで、幅広く分かりやすくご説明頂きました。また、教育者の立場から、著者教育の重要性を説かれていたのも印象的です。北村先生のユーモア溢れる語り口に引き込まれ、あっという間の1時間でした。

## 実体験ならではの説得力 ユーザープレゼンテーション

特別講演によって、研究・出版倫理に関して大局的に捉えることができた。それでは、具体的にどのようなアクションを起こすべきなのか。他に先駆けて研究・出版倫理の改善に取り組んで来られた日本疫学会の橋本勝美氏に研究・出版倫理を考える上で重要な概念と実際に行っている取り組みについてご発表頂きました。

キーワードである「オーサーシップ」「剽窃・盗用」「重複出版」「利益相反」「倫理的配慮」とは何かを分かりやすくまとめて頂き、改めて確認することができました。また、「e-form」[CrossCheck]「COPE」のフロウチャート「Retraction Watchのサイト」等、あらゆるツールを駆使して、徹底した対策・対応をされていると聞き、同じジャーナル編集者の方々とどうして大いに刺激となったようです。

対策を万全にしても、思いがけない形で、不正に向き合うこともあるでしょう。実際にどのような問題が発生し得るのか。公益社団法人化学工学会の山下和子氏にオーサーシップに関する事例をご紹介頂きました。

一口に「オーサーシップ」と言っても、勝手に共著者の名前を外そうとしたケース、感謝の意を示すため研究や論文作成に携わっていない恩師を著者に含めようとしたケース等、問題は様々であることを理解し、それぞれどのように解決されたのか興味深く聞き入りました。実例だけあって、お話が具体的に大変参考になりました。

ユーザープレゼンテーションの後は、不正防止ツール「CrossCheck」に関して、独立行政法人科学技術振興機構の亀井威則氏より、利用の条件や利用状況についての解説がありました。カンファレンスの最後には、事前にご協力頂きましたアンケートに答える形で、S1Mに関する最新情報を杏林舎の鳥海が解説いたしました。

## 「北村先生」「George Kowal」からのメッセージです

ユーザーカンファレンスに参加させて頂きありがとうございました。不正論文のお話をしましたが、雑誌編集の現場で活躍されている皆さんと意見交換ができて、むしろ自分のほうが良い勉強をさせて頂きました。正しい科学情報を広く発信することは、文明社会の責務と考えております。これからも情報を交換、共有しながら発展して行けたら良いですね。よろしくお願ひします。

北村 聖

日本の皆様、こんにちは。  
ScholarOne Manuscripts ユーザーカンファレンスにご来場頂き、ありがとうございました。  
多くの方にご来場頂き大変嬉しかったです。  
今回頂いた日本のお客様の声を、是非今後の開発・サービスに活かして行きたいと考えています。  
これからも、皆様に最高の製品・サービスを提供できるよう努めてまいります。何かご要望がありましたら、何なりとご連絡ください。

George Kowal

## 恒例の意見交換会 最新のニュースに関する ポスター展示も

カンファレンス終了後には、恒例となっているユーザー同士の意見交換会がホワイエにて行われました。研究者を狙った悪徳出版社 (Predatory Publishers) 等のニュースおよび「レポート機能」や「e-form」に関するポスターが展示される中、皆さん軽食と飲み物を手にご歓談されていました。特に今回は、北村先生はじめ、講演をされた方々を囲んで盛んに意見を交換されていたのが印象的でした。

今後もS1Mユーザーカンファレンスは、継続的に開催する予定です。取り上げて欲しいテーマ等のご意見・ご要望等がございましたら、是非お寄せください。

# 公正な論文を出版するための基礎知識

学術論文の出版における問題が世界的に増える中、国内外の研究機関ではその対策を真剣に模索しています。一口に「問題」と言ってもその内容や原因、背景は多種多様かつ重層的であり、CrossCheck 剽窃検知ソフトを導入すればすべての問題がすぐに解決できるわけではありません。論文を執筆する研究者はもとより、研究を支援する研究機関や研

究成果を出版する機関などが、問題の発生を防ぐために出版倫理に関する基本的知識を身につけることが重要です。学術出版において起こり得る問題にはどのようなものがあるのか、もし不適切な論文が投稿された場合、それらを編集過程で見分けるにはどのような方法があり、剽窃検知ソフトで判定できない問題はどのような

いのか、そもそも著者が、問題となる論文を投稿しないようにするにはどのような対策があるかなど、様々な知識とノウハウが必要であり、最新の手法を学び続ける努力も重要です。学術出版倫理の対応に早くから取り組んでおられる日本疫学会様では、問題となる論文の出版を防ぐために次のような取り組みをされています。

## 日本疫学会：Journal of Epidemiology (JE) の取り組み

JEにおける問題回避のための対策	
<b>オーサーシップ</b> 論文発表される研究成果に真に貢献した人だけがオーサーシップとして加わることができます。著者なのに著者に含まない(ゴーストオーサー)、研究に直接関与していない人が名前だけ著者に加わる(ギフトオーサー)など、不適切な著者を含めることは問題です。	この問題を回避する一つの手段として、JEではS1Mオプション機能のe-formを導入しています。論文が提出された後、すべての共著者に対してAuthorship form (オーサーシップフォーム)の提出を依頼し、すべての共著者の確認を取ってから査読を始めるようにしています。
<b>剽窃・盗用</b> 他人の論文から文章やアイデア、データ、研究成果を適切な引用もなく、自分の成果として発表する剽窃・盗用は不正行為の一つです。	JEでは、査読者や編集委員が論文審査の際に問題がないかを確認し、さらにCrossCheckやGoogle Scholarにかけてそのまま出版に進めても問題がないかを確認しています。剽窃や盗用の疑いがある論文に関しては、COPE (出版倫理委員会)のフローチャートを参考にして問題解決を図っています。
<b>重複出版</b> オリジナリティを何より大切にする学術研究では、研究者が過去に発表した自分の論文の一部を別のジャーナルに投稿したり、同一の研究成果を複数のジャーナルに同時発表したりすることはできません。	JEでは、査読者や編集委員がCrossCheck、Google Scholarなどを利用して問題がないか確認したり、Cover Letterに重複出版でないことを著者に確認してもらったり、オンライン投稿システムの投稿時のチェックリストによって重複出版でないことの確認を求めたりしています。またCrossCheckのロゴを投稿システムやホームページにも掲載して、出版後に問題が起こらない公正な論文を出版するように努めています。
<b>利益相反</b> 利益相反とは、「外部との利害関係等によって、公的研究で必要とされる公正かつ適切な判断が損なわれる、または損なわれるのではないかと第三者から懸念を表明されかねない事態」をいいます。著者等の利益相反に関する情報を適切に管理することが重要です。	JEでは、ジャーナルポリシーとして、利益相反に関する情報開示項目を取り決め、それらを全著者に申告してもらう手段としてe-formにDisclosure form (情報開示フォーム)を含めています。
<b>倫理的配慮</b> ヒトを対象とする医学研究は、ヘルシンキ宣言で決められた国際的な倫理基準に従わなければなりません。研究(実験)対象となるヒトの尊厳と人権を守ることがその目的であり、実験動物の適切な扱いも求められます。	JEでは、編集委員が倫理的配慮についても確認をしています。

- (1) 国際的な基準に則った確固たるジャーナルポリシーを策定**  
 JEでは、ICMJE (国際医学雑誌編集者委員会)やCOPE (出版倫理委員会)など、学術出版における問題解決のための国際的な組織が推奨している倫理基準を参考にして、ジャーナルポリシーを決めています。分かりやすい投稿規程を心がけ、著者にはAuthorship form (オーサーシップフォーム)や利益相反申告のためのフォームの提出を義務づけています。
- (2) COPEの会員になって情報を収集**  
 COPEでは剽窃・盗用や重複出版の疑いがある論文に対応するための手順(COPEフローチャート)や出版ガイドラインを用意している他、会員教育のためのe-LearningやWebセミナーも開催しており、JEはCOPEの会員になって様々な情報を収集しています。
- (3) 出版倫理セミナーを開催**  
 JEでは、出版倫理の専門家によるセミナーを学会員向けや編集委員向けに開催しています。
- (4) 最新の出版倫理情報をアップデート**  
 様々な問題に対応するため、JEでは次のような情報収集を続けています。
- ① Council of Science Editors (CSE) などの編集者会議に出席する。  
 → <http://www.councilscienceeditors.org/>
  - ② Committee on Publication Ethics (COPE) のWebサイトで最新情報を収集したり、Webセミナーに参加する。  
 → <http://publicationethics.org/>
  - ③ International Committee of Medical Journal Editors (ICMJE) のWebサイトを参照する。  
 → <http://www.icmje.org/>
  - ④ Retraction WatchのWebサイトを参照する。  
 → <http://retractionwatch.com/>



## 第4回S1Mワークショップ 12月2日(火)開催決定!

今回は、「事務局画面の各種機能」についてご紹介します。

- ダッシュボード画面の各機能と設定
- ユーザーアカウントの検索、作成、編集、マージ(統合)

● 論文情報 (Manuscript Information) ・履歴 (Audit Trail) ・ファイル管理 (Manuscript Files) の各画面内の機能  
 これまでの3回と同様に、約3時間の少人数制で、画面をご覧頂きながら操作方法や機能をご紹介した後、実際に操作を行います。疑問に感じたことはその場で気軽にご質問頂けるような雰囲気づくりを心掛けていますので、

S1Mをご使用になられてまだ間もないユーザー様、ベテランのユーザー様を問わずお気軽にご参加ください。11月上旬に改めてメールにてご案内させていただきますので、参加ご希望の方はメール内のリンクからのご登録をお願いいたします。

## 編集後記

今号1面で紹介いたしましたように、S1Mユーザーカンファレンスは3回目を迎え、過去最多の参加者を得て、成功裡に終了いたしました。これも、ひとえにユーザーの皆様のご支援によるものとスタッフ一同感謝いたしております。今回のカンファレンスでは、論文の剽窃・盗用等、研究・出版倫理を中心にプログラムを企画いたしました。ご協力いただきましたアンケート結果では、北村先生の特別講演や学会の出版倫理の取り組みに関するユーザープレゼンテーションに高い評価をいただき、所期の目的を達成したと思います。

S1Mユーザーカンファレンスは、今後も3つの目的①S1Mの効率的な使い方・今まで気付かなかった利用法の共有、②学術出版にまつわる最新情報と基本情報を共有、③他のジャーナル担当者との情報交換を軸に継続開催し、ユーザーの皆様との情報共有とS1Mの利便性向上に努めてまいります。ご支援、ご協力の程、よろしく申し上げます。(嶋田 朝彦)

## S1M NEWS

2014年10月8日発行 第4号

発行 株式会社 杏林舎  
 〒114-0024 東京都北区西ヶ原3-46-10  
 TEL.03-3910-4311  
 FAX.03-3949-0230  
 URL <http://www.kyorin.co.jp>  
 編集・制作・デザイン 株式会社 杏林舎  
 E-mail [s1mnl@kyorin.co.jp](mailto:s1mnl@kyorin.co.jp)

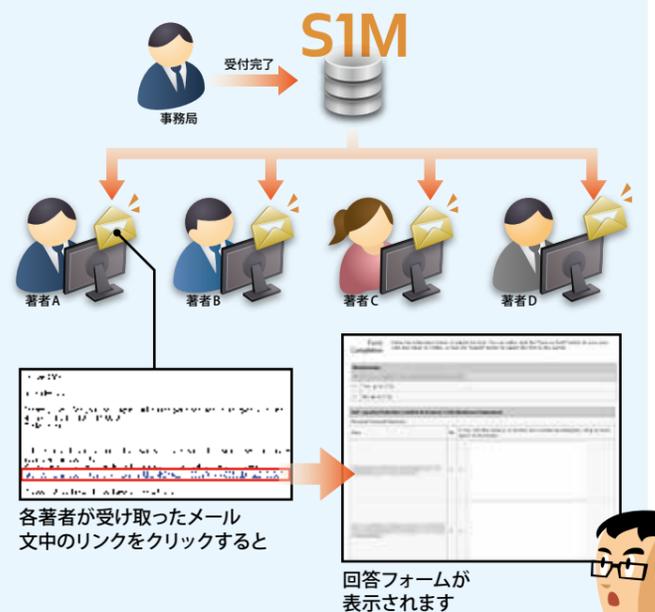
©株式会社 杏林舎 本誌掲載の記事・写真・イラストレーション等の無断転載を禁じます。

## 利益相反や著者同意などの情報を全著者から集められる「e-form」

e-formとは、投稿された論文の全著者から利益相反や著者同意などの情報を集めるための機能です。審査フローや採用後のフローの中に自由に組み込むことができ、設問もカスタマイズできます。

### 例) 投稿論文の確認後にe-formを設定する場合

- ①事務局で投稿論文の確認を行うと、e-formの提出依頼メールが全著者に配信されます。
- ②メールを受信した各著者が文中のリンクをクリックすると、回答フォーム画面が表示されます。各著者は回答フォームに入力し、提出ボタンを押します。
- ③全著者から回答が提出されると、事務局に通知が届きます。
- ④事務局は回答内容に問題がないことを確認し、審査を次のプロセスへ進めます。e-formでは各著者宛でのリマインダーメールも自由に設定することができます。またS1Mを介して事務局へ全著者からの情報が集まるため「投稿者の負担軽減」「書類不備の減少」「論文情報とe-formへの回答の一元管理」といった効果が期待できますよ!



こんにちは! 学術ソリューショングループの山田です。すっかり秋めいてきましたね。今回のテーマは「e-form」です。ユーザーカンファレンスでご紹介して以来、大きな反響がありましたので改めてご紹介いたします。

